

統一

第七百號

四三三二七
仙台了

目次

開會の辭
大日本
演題未定
日蓮上人の人格と其教義
情の日蓮上人
予の日蓮觀
予の見たる日蓮上人
日蓮主義より見たる加藤清正
我帝國と妙法五字
法華經壽量品に對する台日兩祖の異點

文學博士
柴田一能
清水梁山
三宅雄次郎
境野黃洋
高島平三郎
鈴木充美
國府犀東
鈴木天眼
子爵 小笠原長生
清水梁山

日蓮 鑽仰 天晴會 發表 演說

開會の辭

日蓮大學教授 柴田一能君 演說

私は本會の幹事を代表しまして、聊か開會の辭を述べたいと思ひます。天晴會の生れたのは本年の一月であり、至誠敬虔の態度を以て日蓮上人の人格及び教義を鑽仰して、而して之を信じ即ち信仰に入り、隨て之を處世の方針となす様に至り、人々各々其身分職業に應じて、日蓮主義の下に働く様になつたならば、實に國家民生の幸福であらうと思ふのである。

日蓮上人の鼓吹と云ふことは、茲處十年已前より逐年盛んになつて來たので、此間師子王文庫高山博士等の文字の媒介が與つて力あることは申す迄もありませんが、時代の進運か之を促進したのも亦掩ふべからざる事實であります。尤も日蓮上人の出世は今より約七百年の昔であつて、爾來その人格と教義とは随分と國民

文責は悉く記者に在り

の間、研究せられ、信仰を捧げられたに相違ないけれども、それが日蓮宗と云ふ一個の教團に限られたのは、如何にも残念至極の事である、それが今日その文化の進歩に伴ふて、宗外の有志者に研鑽せられ、而も日露役日露役等諸種の國家問題ある毎に、人心の緊約に連れて益々歩武の促進を來したのは、何とも愉快な事である。

願みるに日本の武力と云ふ事は、日露日露兩戰役を経て事實の上に世界の賞讃を博し、隨て戰勝の名譽の下に歡天喜地して武的成效を喜んだのは今や、うたかたの夢と化し去つた、則ち比較的無邪氣の時代は既に去つて今や日本の眞價値なるものが問題として研究せられつゝあるのので、唯徒らに勝つた／＼ではならぬ、歴史上無前の効果を收め得たのは、抑も何か其の因て來る處がなくはならぬと云ふ事に心付き、茲に武士道と云へる我國特種の事實を認め、併し其武士道なる

ものも、其要素を問へば、神儒佛三道の影響感化より出来上つたものであるからして、近年或方面には、禪學の流行を來し、夫れから又陽明學なども唱へられ一方には儒教の復活論などもあつて、諸種の方面から精神修養説 盛んになつて來た、

けれども是等の修養説も、味ひ來れば、ドーも奥行が淺くて根底が弱い……ソコで亦更に一步進んで偉大なる人格……其の人格に依つて實行體現せられたる主義を味ふと云ふ希望が諸處に起つて來た、是れ即ち日蓮上人研究の聲である、

現今日蓮研究會なるものが諸處に起つて居りますが、中には随分如何はしいものもある、又研究の方針指道を得ざる爲めに困つて居る様に見へるものもある、我天請會は、言ふ迄もなく我れ——會員各自の精神修養の糧を得んが爲めなるは勿論であるが、更に進んては、日蓮上人の人格及び主義を鑽仰して求道者の相談相手となり、上人研究者の善友たらんことを期し、以て國家民生の爲めに大に裨益を興へんと欲するの希望を以

大日本

唯一佛教主華 清水梁山君 演説

此演題は今晚の月次講演の小笠原君の講題（日本國と妙法五字）と衝突の憂ある様に思はれますが、決してそうでない、一字加へて「大日本」と題したので、是は一寸考へますと判り切つた様な題であります、併し

て生れたのであります、斯る希望の下に、我天晴會が此の帝都に生れ出たといふことを、社會に發表する爲めに本日をも以て公開演説を開いた譯であります、本會の趣意は、茲に印刷してあります所の「天晴會趣意書」に掲げてありますから、一寸朗讀いたします、趣意書は本誌に既に載せられたれば略す、此の趣意書は會員三宅博士の執筆せられたものであります、猶是れより此の趣意を中心として會員諸君の演説がありますから、充分御静聽の程を願ひます、

日蓮主義の爲めに是非云はねばならぬ事であり、世間には兒童も猶ほ且つ勇ましい活き／＼とした調子をこめて「大日本帝國萬歳」大日本帝國萬歳」と唱へて居ますが、此「大日本」と云ふ國號に就ては面白い事がある、それは日本の上に大の一字を加へたる歴史上の事實に就てあります、神道家杯は神武天皇の御名「かんなやまと」「おほやまと」を以て、大日本の稱號の起源なるかの如く吹聴して居ますけれども、今我等が呼ぶ大日本の意味では決して無い、今我等が呼ぶ大日本の稱號は、對外的に小に對して云ふ建國の強固なる意味を含める大日本である、

神代史に大八州と云ふ稱があります、それが日本本土及び四國、九州、佐渡、隱岐、壹岐、對馬等を總稱した號であつて、此大八州の中に「おほやまと」は含んで居るので、要するに「おほやまと」とは日本全土を總稱せし稱呼ではなく、日本全土の或る一部を云ひ現はした號であつて、今我々の呼ぶ字內的の大日本では決してない、

然らば大日本とは何時頃から云ひ出せしものなるか、日本の全土の本領から對外的に大日本とは誰人が云ひ出せしものなるかと云ふに、予の見聞の狭さ、歴史上其稱號の起源を他に求め難ひ、我日蓮上人の御遺文の外にはないのである、水戸黃門光圀卿が大日本史の編纂に着手せられた頃は、皇朝史と稱して大日本史とは稱けなかつた然る水戸光圀卿、平素法華經を信ぜらるゝ所からして水戸の久昌寺といふ日蓮宗の寺に屢々遊ばれた、此寺は檀林であつて藏書なども澤山あつたのですが、或時黃門公は日蓮上人の有名なる蒙古御書を御覽になつて其冒頭の文に

小蒙古人大日本國に寄せ來るの事云々

とあるを見て、蒙古は四百餘州を一統して土地の面積人口國力何れの點より見ても大である、我日本は凡ての點より比較して小である、然るに彼を賤して小蒙古と云ひ、此の叢爾たる日本を呼んで大日本とは、實に不思議な結構な文字であると云ふので一向感嘆し、是れより大日本史と命名する様になつたと云ふことであ

りすす、

我國開闢以來、對外的に正しく大日本と公言したのは實に我日連上人を以て嚆矢としなければならぬ、上人が大日本と大聲疾呼せられたのは、法華經主義の見地より起つて、日本國の眞價を認知せられての語である、故に上人の此大日本を公言せらるゝ語には眞に大日本は偉大なるものであると云ふ根底ある愛國の思想が充實して居るのである、

然るに此の大日本國を以て穢土と稱し、西方十萬億土の極樂を夢想し、此の神聖なるべき日本國の眞價を認むることを知らざるが如き、念佛門徒などは、亡國の民と宣言せねばならぬ……是れより法華經に依りて理解せらるべき大日本の眞意義を少しく御話したいと思ひますが、唯今幹事から後席の辯士の時間都合があるから降壇せよとの通告ですから、是て御免を蒙ります……

日、何だか御幣を昇ぐ様だが、少し位昇いてもよからう(笑聲起る)

其頃迄は日蓮宗は随分衰へたもので、此人が出てから新に振ひ起り、日蓮宗の面目は茲に少しく改まつた、其後日蓮上人の様な豪い方が出たが、先づ日輝師を擧げて置けばよい……處て此輝師の後はどう成たかと云ふに、輝師は字を堯山と云つた、其堯山の二字を分けて、先刻出席された清水君が梁山、今一人鶴田君が堯山と申される、此二人で日輝師になるのだ相である(笑聲起る)

右兩人が近世日蓮宗を振ひ起した日輝師の後繼者で、又孫弟子である、或は二人で日輝師になられるかどうかと云ふ疑問もある(笑聲起る)甚だ輕蔑した話であるけれども……實は兩師共一人で背負ひて起つ積りかも知れぬ……或はそれ以上に出んとして居られる相(笑聲起る)、見て居れば何れ事實に現はれる……併し此二人にまかして置くと云ふにも及ばぬ(笑聲起る)、日輝師は衰微して居た日蓮宗を振ひ興した、今日

演題 未定

文學博士 三宅雄二郎君 演 說

演題未定と云ふのですから、私は出ても出なくてもよい様な事を云ふて見る積りで、演題未定なのです、茲處に「天晴會の趣意」と出してありますけれども、是は幹事が勝手に出したので、それは他に違へらるゝ人があらうと思ひますから、矢張未定と云ふ處で極めて簡短にやりませしやう、

天晴會に關する總ての事は徳の方が云ひませしやうから私は一ツ短の處をやりませす……此會の開かれた日、即ち本日は四月の十四日(笑聲起る)日蓮宗を近代振ひ起したと云ふ同宗一方の學者たる日輝師の満五十年の祥月命日になる、日輝師の命日は安政六年二月廿三日で、今日は則ち其陰曆の二月廿三日だ、其事は多分皆様が御承知ならなかつたらうと思ふ、其れ文中せば日輝師の事は充分御承知の事と存じます……祥月命

は日輝師以上に出て、更に大に日蓮の教義を振ひ興して貰わねばならない、今の處では開んな人は現はれない、未だ安心は出来ない……が其れは事實にあるものと認めて置て差支ない、

今の處は此位な處から進んで出てよからう、日蓮は未だ遠い處に御坐る、先づ其位な處から……次に日蓮に、次に日蓮以上に……日蓮には企及し難い處もあるだらうが……而し又どこ迄も日蓮の下に居ると云ふ様な、ケチな事ばかりも言ふまい……一面からは其が日連上人の本意であらうと思ふ……斯云ふ事は日連の何處ぞに言ふてあるだらう、まだ調べた事はない、けれども大なる誤はなからうと思ふ……これ丈云へば餘り不都合もなからう、それ以上上の事は此あとに豪い方々……(笑聲起る)豪いと云へば語弊はあるが、色々の方々が控へ居られるから、時間を總て其方々に譲つて、私はこれで……

日蓮上人の人格と其教義

東洋大學講師 境野黄洋君 演説

私は日蓮上人の人格及教義の研究者でありませんが、未だ全く絶對の信仰を拂つて居る者とは言はれない、隨て日蓮上人の事に關して諸君の満足せらるゝ様な談話は出来ないと言ふ事を、豫めお断りして置きます、日蓮上人の人格と其教義……題が餘りに大袈裟過ぎて三宅先生の所謂語弊に陥つて居る方かも知れない、就中教義と申した處で、ほんの自個流の研究に過ぎない、併しこの南洋の研究したる日蓮上人及び教義と云ふ分には間違ひはなからうと思ふ、其積りてお聽きを願ひたい、

世の中の人には上人を如何に見たるかと云ふに世人は上人を目して激烈である、猛烈である、今一段露骨に云へばずる人である政治家だ政略家だと云ふて居る……何故なれば其行動が政事家じみた點があつて、則ち四個格言の絶叫に就ても、ささかあゝと思ふたの

ては無からうが、自家の主義を弘める爲めに政略として激烈に號呼したのだと、斯様に言ふて居る、日蓮を賞める方がそう云ふて居る、即ち今の政事家が政黨などを繰繰するやり口に比較して中々豪いと讃めて居る、併し是れは皮想の見である、苟も宗教家として六百年來人心を感化せし上人に、そんな事が有らう筈がない、又激烈な丈で、決して人を動かす得るものでない、世の著作の多くは上人を熱烈なる情的人物とのみ見て居る、即ち上人は主義の爲めに一命を賭して奮闘した、極めて熱情の高い人であると云ふのである、成程それは上人の一面の事實であらう、上人の激烈なる部分は、感情的と云ふよりも寧ろ憤怒的に怒鳴つた方面で、即ち開目抄に「我れ日本の柱とやらん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならん等と誓ひし願やふるべからず」と絶叫し「善につけ惡につけ法華經を捨つるは地獄の業なるべし」と断じて「日本の國王の位を卿に譲るから法華經を捨て、淨土の三部經の持者となれよ」と云ふとも「父母の頸を刺れる

ぞ念佛を唱へずば」とおどすとも「智者に我義移れざるかぎりは用ひず」と喝破せられた、此語を讀む時は實に肉躍り骨立つの憤がある……骨立つと言ふ熱語があるかどうが知らんが……兎に角壯烈である併しながら此怒鳴つた壯烈な邊だけが上人の人格ではない、一方から見れば非常に謙遜抑讓の人である、世人は之を逸して居るやうだ、即ち「日蓮は旃陀羅が子なり」と自稱して居られる「旃陀羅」とは印度の「チャンドラ」の事で賤民と云ふことである、鎌倉當年の門閥甚しき時代になりて自ら「旃陀羅が子なり」と、思ひ切つて此語を放たれた其の勇氣のみではない、非常に謙遜の美德を備へた人と云はねばならぬ、我々は人に向つて「おの親は乞食だよ」なんて言ひ得るものではない、お互は自分の郷里の事と他人から聞かれた場合に、僕の家は大した譯にも行かないがマー普通には暮して居る位には言ふものです、其外一つ二つ御道文によりて、上人の謙遜の事實を紹介すれば「日蓮は身に戒行なく心に三毒を離れざれども云々」日蓮はさせる

戒行をも持たず……云々」等の教節、實に其謙讓の美德が仰がれる、併しながらその反對に、法華經と云ふ威念の頭腦に閃くと同時に、自分は法華經に對して自ら卑しむ事の出来ぬと云ふ自覺を持ち、身は天地に充つるが如き念ひがあつたのである、傲慢を見て大膽と見へたのは、全く法華經信仰の爲めである、即ち法華經が身に満ちし時には大言を爲し、五尺の凡身としては謙遜であつたのである、されば日蓮を語らんとする者は法華經に依れる信仰教義を味ふべきです、斯ふ云ふ事を研究しないで、單に日蓮上人を豪いと云ふ様な輕薄な議論は私はとらない(喝采)日蓮上人を研究するには、上人の信仰を研究しなくてはならぬ、唯上人と云ふことが豪い、何となく溜飲が下るスーッとすると、そんな事では駄目である(喝采)

然らば上人の教義はと云ふに、私の素人考から上人の法華經の信仰に如何と云ふ間に答へて、私は便宜上かりに活現主義と云ふならよからうと思ふ、日蓮上人の

特色は何處にありやと云ふことが、今迄は唯宗内丈で研究せられたのみで、門外漢は一向之を知らなかつた然るに今や大に内外人士によりて色々研究せられつゝある、开處て私は右申す如く、日蓮上人の信仰は活現主義なりとの考察を遂げたのである、之を明にする爲に日蓮教と各宗との相違を述べて見ませら、活現主義は色々の方面から云ひ現はされる、其一は實行的と云ふてよからう、と云ふと宗教は皆實行的で、空論の宗教は無いと云ふ論者もあらう、けれども佛教内には随分と哲學的に理論計り骨張して、實行の少しも伴はぬものが多い、昔は實行したかも知れんが、それも僅かである、一例を挙げれば天台宗の如き豪そうな人は随分と澤山ある、けれども天台宗の人に天台大師の行つた様な觀念觀法と云ふことを實行して居るや否やと云ふと、开んな人は鐵の草鞋で探がしても居まい、唯面白から讀んで居ると云ふ迄である、天台宗の法華經は理論的で日蓮宗のそれは實行である、その事は日蓮上人の佐渡流弊の時弟子日朗に與へし土籠

御書を見れば判る、與うである「日蓮は明日佐渡の國にまかるなり、今宵の寒きに付ても籠の内の有様思ひやられていたはしくこそ候へ、あはれ殿は法華經一部を色心二法共にあそばされたる御身なれば、父母六親一切衆生をもたすけ給ふべき御身なり、法華經を餘人のよみ候は、口ばかり言ばかりはよめども心はよめず、心はよめども身によめず、色心二法共にあそばされたることを貴く候へ」則ち世の中の學者僧侶は、口計り法華經を讀んで之を身に讀むものがない、之を身讀色讀するのが日蓮の實行主義である、又當鉢義鈔の中にも當體の蓮華佛とは「父母所生の肉身是也」と示されてある、されば此肉體が法華經となつて働くのが蓮華佛であると云ふのです、眞言宗は我が身心が即ち大日如來なりとの觀念主義であるけれども、其實行如何と尋ねると、坐禪觀念で大日なりと悟ると云ふのだから、則ち觀念主義である、之に反して本宗のは何處迄も活動主義である、身讀主義である、淨土宗は如何と云ふに、彼宗は徹頭徹尾活動主義であ

る、之に反して日蓮宗は現在主義である、即ち世人が手を震し足を動かして居る所が佛だから未來の西方極樂を云ふ必要がない、然し靈山住語と云ふことも云ふから未來を認めないので無いが、淨土宗のような未來主義とはちがう、禪宗は迷の外に悟なく是心是佛と立てる、理屈は結構である、そんなら此の身體のまゝて宜いかと云ふとそうでもない、若し亦我々凡夫がそのまゝ佛と云ふならば、佛の盜賊、佛の火付が開處等にうろ／＼して居る事になる、それだから禪宗では理想を認め、對よに佛を置いてそれに近づくべく種々の工夫をなさしむるのである、之に反して本宗は毎日行つて居る所が佛で、一舉手一投足歩一步戒壇に上りつゝあると教ゆるのである、要するに、坐禪により或は戒律により、其他種々なる行法が各宗にそれ／＼教へられてあるが、日蓮宗の主義は、なさんとしつゝある事、なしつゝある事の總てを、歩々靈山に向ふべく、所謂日常生活の上に活現

實行を教へたのである、日蓮上人生涯の歴史は此事を證據立てて居る、親覺法然等は純粹に理想を實現せりやと云ふに、如何に考へても日蓮上人程緊密に實現せられて居ないと思ふ、日蓮上人一代の行動は、其建長開宗の始めより身延退隱、さては池上入滅の終に至るまで、どう見ても法華經に手足の生へた人、しか思はれない(拍手大喝采)而して我々も日蓮上人の如く我々の一舉手一投足が法華經そのものとならねばならぬ、又なるべく勤めねばならぬ(大喝采)法華經一部八卷の文字、それを唯口でばかり讀んでは何等の感興は浮ばない、色讀身讀してこそ始めて釋迦如來の血の通へる法華經たることを感得し得るのである、之から吾々も法華經に手や足の生へた一代を活現せねばならぬ、日蓮上人の眼には法華經を見るに、紙も文字もなく唯釋迦牟尼如來の血の通じたるものと見たのである(大喝采)此の見解を以て日蓮上人の一代を案ずれば、上人の生涯は歴史を超越して居る、其智識は極めて清透、其信

仰は極めて熱烈、而うして一舉一動は皆是れ法華經の活現、真に上人の如きは超歴史的偉人と云はなければならぬのである(拍手大喝采)

情の日蓮上人

女子大學講師 高島平三郎君 演説

私は日蓮上人の研究に就きましては、極めて淺薄なるものでありまして、唯平素上人の遺文全集を愛讀して居るのみで、廣く上人の教義等を、取調べると云ふ様なことは出来ないものであるが、唯だ上人が吾人の師標として、殊に日常修養の標本として偉大なる人格の御方であると云ふことは、深く信じて疑はないのであります、世人は日蓮上人を以て怪僧である、傑僧である、而して非常に我の強い人であると評して居りますが、是等の批評は結構です、別に否定するに及ばない、實に上人の如きは怪僧と申さば怪中の怪なるものでありませう、傑僧と云はば傑中の傑でありませう、上人は我が

強いと云ふが、然し上人には我と云ふものは少ない、若し我を張るといふ事は、大なる我である、上は十三天の空に達し下は奈落の底迄も徹する如き我であつて、威武も居する能はず、富貴も淫する能はず、刀鋸鼎鑊も之を奪ふことの出来ないところの我である、然し私が今日御話致しますのは、斯ふ云ふ方面でなく、極やさしい美しい情的方面の日蓮上人である、私は常に遺文を拜讀いたしまして、上人が非常に情の深い御方であると云ふ事を思ふ毎に、獨り感涙を催ふ次第であります、それは先づ第一に
上人は人の恩義を非常に深く感じられた上人の遺書を拜しますと、弟子檀家の人々より、芋だとか、餅だとか米だとか云ふ様な品物を贈られたるに對して、上人は實に満腹の精神をこめて謝意を表して居られる、而うして平素の情義の上より又は宗教上の意義の上より如何にも誠心をこめてある、此種の御遺文は澤山あるてありませうが、船守彌三郎に對する御消息に

わびと便を以て、ちぢさ(糍)さけ(酒)ほしひ(干飯)さんせう(山椒)、紙しなく給候ひ畢、又使者申され候は御かくさせ給へと申上候へと、日蓮心得可申候、日蓮去る五月十二日流罪の時、其の津につきて候しに未だ名をも聞及びまいらせず候處に松より上り苦み候所に懇にかたらせ給候し事はいかなる宿習なるらん過去に法華經の行者にてわたらせ給へるが今末法に松守の彌三郎と生れかわりて日蓮をみ給ふか、たとひ男はさもあるべきに女房の身として食をあたへ洗足てうづ其外さも事ねんころなる事日蓮はしらず不思議とも申ばかりなし、ことに三十日あまりありて内心に法華經を信じ日蓮を供養し給事いかなる事のものしなるやかゝる、地頭萬民日蓮を憎み嫉む事鎌倉よりもすぎたり、見る者は目をひき聽く人はあだむ、殊に五月のころなれば米も乏しかるらん、内々にてはぐみ給しことは日蓮が父母の伊豆の伊東のかわなと云ふ處に生れかわり給か云々

此の外宗教上の意義より種々に彌三郎夫婦に對して感謝の意を述べて居ります、宗教上の深遠なる意義は暫く指さしまして、吾人日常の事より見ても大に味ふべきものと思ひます、世間には随分醜狀とか謝狀とか云ふ消息文は澤山ありませう、けれども斯程に感恩の誠意をこめた文は恐くは多く類を見ないてありませう、殊に『過去の法華經の行者にてわたらせ給へるが今末法に松守の彌三郎を生れかわりて日蓮をあわれみ給ふか』と云ひ『日蓮が父母の伊豆のかわなと云ふ處に生れかわり給ふか』と云ふあたり、實に世の文筆の徒の千言萬語を列ねたよりも無限の味があるてはありませんか、感恩の誠意が内に溢れて居らなければ、斯る語辭は決して出るものではありません、四條金吾と申す方は、上人の事業に對しては献身的に補佐した人でありませう、又上人が金吾殿に對する感謝の念といふものは實に一通りにはありません、若し足下が佛果を得るなら俱に佛果を成じよう、亦汝が地獄に行くならば予も亦地獄に行かう、釋迦佛も法華經

も地獄に在はして吾等を教ふて下さるる方」と申された位で、實に其の感恩の情、通切を極めて居りませす。

今日學生と教師の間でも、朋友や兄弟の間でも凡て吾人相互の間でも、道義上の一大缺點と云ふものは、此の感恩の念の薄いこととありませす。願くは平素相互に上人の如き斯くも感恩の念深き人格に接して、品性上の修養を積みたいものと思ひませす。

次に申上ぐべきは

上人は最も愛國の感情に富んで居つたこととありませす。此の點に就きましては種々の方面から御話する材料も有りませせうが、其中の一を挙げませすれば、上人が法華宗を開くの前に、態々伊勢の大廟へ廻つて、天照太神へ奉告せられませしたるが、これは日本國の祖宗の神であるからとありませす。普無畏三藏書には

天照太神正八幡宮等は我國の本主也造化の後神と顯れさせ給ふ此神にそむく人此國の主となるべからず

たすけ給ふべき御身なれば法華經を餘人のよみ候は口ばかりことばばかりはよめども心はよませず心はよめども身によませず色心二法ともに遊ばしたるこそ貴く候へ云々

此の當時の日蓮上人の境遇といふものは言ふに言はれぬ程非常に御艱難の中に在つたので、則ち龍口の斬刀臺を造れて間もなく將に明日を以て海山萬里佐渡の孤島に流竄せらるる場合仲々他人の事を考へて居らるる様な場合ではない然るに上人は斯る千辛萬苦の中にありながら、自分の苦みを忘れて、切に御弟子日朗上人の身の上を案じわづらひて、「今夜のさむさむにつけても牢の中のありさまいたわしく候へ云々」と申し遣されたので、其の情義の深きこと切なること、字々悉く涙、句々皆血であります。私は常に若し世人が斯る心持を以て、親子兄弟乃至家庭の間に臨んだならば、何事か和融せないと云ふこととは思ひませす。家庭の圓滿和樂を破るといふ様なことは斷してないと思ひませす。

とありませす、是れ實に上人が愛國の感情に富んで居るところの源泉とも申すもので、後年大に愛國の思想を振ひ起すに至つたのは、皆此の感情の流露發散したるものと申すべきであります。

それから亦

上人は大に師弟の情義に富んで居つた上人は、苟も己れの主義に反する者は、何人と雖少しも忌憚なく呵責せられたけれども、亦其の主義を同する者に至つては、其の情義の濃かにして懇切なることは他に其の比を見ない、殊に其の師弟の情義に富めるの點に至つては、彼の有名人なる土牢御書を一たび讀むならば殆んど感涙を催さずには居られませせん、即ち同書に

日蓮はあす佐渡の國へまかるなり今夜のさむさむにつけてもろうの中のありさま思ひやられていたはしくこそ候へあわれ殿は法華經一部を色心二法ともにあらはしたる御身なれば父母六親一切衆生を

上人に亦父母に對する孝の感情が非常に深かつた上人が身延山に在つて、御歳五十已上でありながら亡き父母を追慕するの念深くして、屢々五十丁に餘る御山を攀ぢ登つて、遙かに故郷房州の方を望み兩親の墓を拜された思親閣の遺蹟は、上人の孝心深き名高いお話であります。丁度此の延山在住の時代は、アマノリの寄贈を受けた時のことが新尼御前御書にありませ

あまのり一ふくろ送り給舉、古郷の事はるかに思ひわすれて憂くつらし、片海市川小湊の磯の邊にて昔見しあまのりなり色形あぢもかはらずなど我父母かはらせ給ひけん、かたらがへなる恨めしさ涙おさへがたし

これは海苔を見て我古郷の小湊を思ひ父母のことを思ひ出して涙おさへ難くなつたと云ふので、此の文を拜しても、上人が唯だ我ばかり強い御方てなくして、實にやさしき情的方面の非常に發達した御方であることがわかる、殊に此の文の如きは少しも飾りも何にも無い上人の情的眞面目が能くあつて居つて、之を讀

む中に何となく我々をして感涙を流さしむる次第であります、また光日房御書を見ますと

御勸氣の身となりて死罪となるべかりしが、且く國の外に放たれし上はをばろげならては鎌倉へは還る可からず還らずば亦父母の墓を見る身となり難しと思ひつゞけしかば今更飛び立つばかりくやしく、など斯る身となさりし時、日にも月にも海も渡り山も越えて、父母の墓をも見、師匠の有様をも訪ひ音づれざりけんとなげかしく候

とあります、是れは佐渡流罪中亡き父母を思ひ出して斯る身とならぬ前に両親の墓に参つて置かざりしことを非常に歎げられたもので、自らは佛性の自覺を得て、末法の大導師としの偉大なる靈的觀念が、満身に充溢して居つたのであるのに、而も猶ほ両親を追懐するの情止みがたく、事に觸れ物に感じて孝心の情を動かすといふは、世の孝情厚き人々の間にも、殆んど見ることの出来ない、尊い感情であります

次に

か否か不明であります、而し日蓮上人の如き美はしき感情に憧憬することは生涯變らぬ積りてあります、否斯る美はしき感情は何人も持たねばならぬものと思ひます(拍手大喝采)

予の日蓮觀

釋國士 鈴木弁美君 演説

私は人様のお断を聞くのは好きてありますが、人様に断す事は下手であります、殊に本日は飛入りの事ですから到底諸君の満足さるゝ様な演説は出来ませんが、唯私の考へとして、法華宗即日蓮宗の如何にして成立つたかと云ふ事を、少し断して見やうと思ふのである、

一佛の金口から出た佛敎が、各宗各派と數多に岐れたのは不思議の現象であつて就中或宗と或宗との如きは殆んど先天的仇敵同士の如き間柄であつて、日蓮宗から念佛無間禪天魔………と四個格言を絶叫する反對

上人は動物を愛するの感情に富んで居た
波木井殿御書に

栗鹿毛の御馬は、あまり面白く覺え候ほどに、いつまでも失ふまじく候、常陸の湯へ引かせ候はんと思ひ候が、若し人にもぞ取られ候はん、又其外痛はしく覺へば、湯より返り候はんほど、上總の薬原殿のもとに預け置き奉るべく候に知らぬ舍人を附て候ては、覺つかなく覺え候、罷り返り候はんまで此の舍人を附け置候はんと思し候

栗鹿毛の馬は長く可愛がらねばならぬ、又人に取られる様な事があつてはならんとか、知らぬ舍人を附けては可愛そうであるとか申されてあるので、これのみにても如何に上人が、動物に對して慈悲深き美はしき感情の佛性が發現せられて居るか云ふことが解る、どうか諸君が、上人の遺文を讀んで、そうして日蓮上人其の人の天真爛漫たる、尊といふ温やかなる感情を能く仔細に觀取せられんことを御願いたします、私は將來敎義上の事は皆さんに御話の出来る様になれる

に、一方からは「法華が佛になれば牛の糞が味噌になる」との俚語をさへ耳にする、彼の有名なる葛城慈雲尊者の金剛經の註釋の中に、沙門托鉢の事を説た一節に、王者の門にも貧家の門にも一枚平等に立たねばならぬ、しかのみならず日蓮宗信者の門にも立たねばならぬと書てある随分と妙に感ぜらるゝてはありせんか、

斯く一佛所説の下に互ひに其宗とする所を分張して、仇敵の如き間柄となれるを見れば、佛陀の説は本來矛盾せる素質を有せるにはあらずやとの感があります、決してそうでない、何となれば佛陀説法の目的は普ねく萬機を濟度するにあつて、善惡智愚種々なる者へを持つて人々に對して、則ち受ける機根に應じて八萬四千の敎門を開かれたのである、斯く色々の方面から説かれたものであるから、卒爾に之を見ると抵觸矛盾せるが如く思はれるが、若し仔細に觀味すると、其間一貫せぬ脈絡系統のある事が分るのである、
开處て日蓮宗の如何にして起りしやと云ふ事を、素人

考へから説き及ぶが、是は私の愚考ですから或は諸君が聴きになつて可笑しいかも知れない。開處はどうか御了簡を願いたい………、鎌倉時代に於て其當時の宗教の腐敗人心の墮落に餘蘊なくせられて、萬打捨て置き難く、終に熱誠なる上人を喚び起すと同時に、上人の高尙なる識見の相伴ふて一宗を堀起されたものと、私は考へるのである。それは其識見と云ふ點は、第一上人の修學上から見ても直ぐ判る、たとへば法華經に對する識見にしても、天台は迹門方便品の立場から之が判釋を下し、上人は本門壽量品の見地よりして之を解釋するの區別がある、其外に上人をしてどうしても一宗獨創の止むなきに至らしめたのは、當時宗教界の腐敗墮落であり、御承知の如く我日本の文學歴史の多くが宗教家の手によりて飾りなされて居るのは事實であるが、夫と同時に宗教的感念から見たならば實に腐敗の極と云はねばならぬ、何となれば其當時の各宗派の教家たるものは、兎角に人を教ふと云ふ教家唯一の本領を忘れて、只管顯門に蹈び説らひ、自己の

予の見たる日蓮上人

國府犀東君 演説

出席の順序が違ひまして何とも心苦しい事です、淺草へ行つて見ますと二王さんは入口の山門に居らしやつて、一寸八分の觀音さんは本堂の奥の方に居らしやつて、其通り私の様な肉軀の大きい無學のものは、ずつと最初に出席する筈なのですが、まご／＼してる内に先を越されまして、今頃耻かしくも出席する事になりました、どうか宜敷お察しを願ひたい、尙ほ演題は一向私の知らん事で、是は全く幹事に一任して置た譯で「予の見たる日蓮上人」と云ふ實は試験問題を出された様なものである、併し出た以上は仕方がありません、及第するか落第か知れませんが、兎に角試験を受けて見せしやう、

今一つお断りして置きたいのは、實は此一月十日に京都三條に一泊して、十一日に叡山へ登りましたが、折しも近年になき大雪で、其雪の中を近江山城の分水嶺

名聞利慾にのみ耽つて居つた、如何にの旺盛を極めても、民人救済を閑却せる宗教は之を墮落と謂はざるを得ない、其實例を擧ぐれば、當時飢饉打ち續きて餓死するものが多かつたにも抱えず、宗教家たるもの肉體上精神上何等之に對する救済の手を下さなかつた、この現状を見たる上人は奮然として躍起されたのである、斯る時代に當つては念佛無開禪天魔真言亡國律國賊として、四個格言をば堂々擧らず主張したのは一方からは宗教革命の聲であると共に、亦他面には時代の腐敗墮落を救ふの大良薬であつた、然るに時の政府は上人の言を聞くことなく、却て上人の節を曲げしめんとして喧はすに利を以てし、一千町の寺領を添へて愛樂堂の住持たらしめんとしたが、上人は斷乎として之を拒斥された、要するに此時運の衰微を見て、自己の研究せる高尙なる識見と相和して、遂に一宗を唱導せらるゝに至つたのであらふと思ふのである、是て私は御免を蒙ります、(喝采)

を辿りて横川の淨光院に日蓮上人の舊跡を訪ひました、其時若い僧の讀經の聲の賑々れたのを耳にし、たが、私も其今日は非常に賑々れ聲で、是れは實に此中旅行の爲め筑波おろしの風に侵された爲めと御承知を願ひたい、

先刻境野君が素人考への日宗教義と云ふ事のお断でありましたが、私のは歴史上から見た上人を語つて見る積りなので、それもほんの一部分に過ぎない、先づ上人の御像に就てお断致しますが、普通寺々の像は至極柔和なる姿に出来て居ます、是は世の誤解を解かん爲めに、特に温厚篤實の姿にしたとも云ひ得られ様が、併し弘安四年即ち上人の御存生中に、浪木井殿の或ものに命じて造らしめた御像も、ちやうど早く申せば、只今此席に居られませんが、脇田僧正とそれから本多僧正とを携う交ぜた様の姿に拜せられる、それから池上本門寺に大藏某の作りし像がある、是れは餘程古いもので、二代將軍の頃、清正公の娘にして紀州家へ入興されし人の手入されたものだそうで、又池上には今

一つ古き像ありとの傳記があるが、今其實物は無く、其寫しが博物館にあります。而して又其を手本として岸駒の畫さしものが岩倉實相寺に傳へられ、今はそれが京都の博物館にある、が其像は非常に可惡姿である。則ち何れも其尊体の長大と云ふ點は一致して居る一方は非常に溫和なる姿、片方は非常に可惡そうなる姿と格段な相違がある、併しながら最も古き波木井殿の温顔の分が歴々とした證據で、それさへあればよい様なものゝ、今少し研究して見たらよからうと思ふ、又鎌倉の安國論寺に小形の銅像があるが、是は恐らく博多の銅像の縮寫であらうと思ふ、元來歴史上の人物で其容貌の今日に確實に傳へられたものは尠ない、平清盛もいろ／＼と傳へられてある、夫に就て面白い點は小野の小町である、たしか三宅博士の説でしたらう、美人の雛形に「おかめ」であつて、小野の小町は全く其雛形にされたものだとの事である、成程王朝時代の圓滿を嘗みし當時は、それこそ「おかめ」は美人であつたに相違ない（笑聲起る）斯ふ云ふことは歴史上

してやす／＼と即夢の枕的に嘯さして戴きたい（辨士眞面目に願ひますとの聲あり）
今少しは耳を拜借することを得るならば、歴史の方面より見たる日蓮上人を語つて見たい（謹聽々々）私は元寇の歴史に興味を感ずるもの一人で、特に上人の歴史には非常の趣味を覺ゆるのである、元寇と云へば時の執權北條時宗が、文永二度の政策即ち對元策には非常なる苦衷を存する事は、今更ならぬ所であつて、隨て其時代に上人が之を九ヶ年以前に豫言して、先づ何よりも精神界の統一を圖らざるべからずと絶叫せられたのは、何とも敬讃の外はないと思ふ、
元寇の事……其組織の大なる實に驚くべきもので、連日清役の直隸省中心の兵の如きものは決してなと、雲南、安南、西藏、蒙古、滿洲等殆んど亞細亞大陸奉つて、大仕掛けである、隨て海軍根據地を臺灣と津波と樺太との三ヶ所に設け、樺太のは黒龍江の上流より今の所謂沿海州を経て朝鮮に出て、茲に南北相合して濟州島を経て日本に襲ひ來つたのである、其後も

の人物を取調べるには、非帝に参考になりませす、それから日蓮上人は、上人渴仰者の側からは夫こそ法華經に手足が生へた處ではない、菩薩中の上首上行菩薩の再來とある、斯る御方に對して研究とは抑も禮を失したることゝ云はねばならぬ、併し或る場合には研究も必要であらう、けれども信仰界の偉人を研究するには、充分の敬意を表さなくてはならぬ、自分は研究は失禮と存じまして、ほんの足跡を捜す者を起したのである、てすから足跡らしき箇處、若くは眞の足跡があつたならば、どうか諸君はこの私へ御一報を願ひたい、
次に先刻境野君が、日蓮上人を過られた様なことを私も違へる積りであつたのですが境野君がスツカヤつて呉れたから此點は敢て蛇足を添ゆる必要なに似たる様なものの、少しく……（此時簡單々々の聲起る）簡單と仰せがなくても、無論未熟な私の事ゆへ簡短にしか違へられない、唯もう上人鑽仰の微衷から敢て此席へ出た譯で、どうかそこは肝膽相照して、私を

樺太から蝦夷を襲つたが、不利と見限りて引揚げた、是は上人遷化の後の事である、
此大難に際して時宗の如何に苦心したかは、略ぼ國民の諒とせる處であるが、それと同時に靈的權威を以て「蒙古退治の大將軍は日蓮なり」と絶叫し……時宗以上の……泰然不動どころが其れ以上の……大々的の信念を以て、當代を警醒したる日蓮上人の面目を忍んで貰ひたいのである、此のあたりが日蓮上人の本面目の存する所である……（大喝采）

日蓮主義より見たる

加藤清正

衆議院議員 鈴木天眼君 演説

私は日蓮宗に縁の深い方で、日蓮上人を信仰して茲に二十餘年、滿腹の渴仰を上人に捧げて居る一人でありますから、上人の氣魂精神の幾分をは確かにつかまへた積りである、开處で日蓮主義とは如何と云ふに、南無妙法蓮華經が日蓮上人か、日蓮上人が南無妙法蓮華

經か此二者唯一合鉢の點之を日蓮主義と云ふのである
そうして此點より見たる加藤清正を論じて見たいのて
ある。

私の身は昨今非常に忙しい、恰かも怠慢書生の試験前
の如く、今日も現に早稲田大學の擬國會に出席を依頼
された、先の方へ出れば文部大臣位には成れたのです
が、先天講會の演説に出た爲め、可憐文部大臣となり
そこねた仕合である(笑聲起る)依ては可成は、時間を
節約して可成たけ多くの事實を語る覺悟で、場合によ
りては駈足で朗讀をやるかも知れません。

さて清正公……清正公の南無妙法蓮華經の七字に於
けるは、恰かも不動明王の火炎に於けるが如く、管公
の梅花に於けるが如しと謂ふべきである、清正公の脊
負へる七字の旗は、宗門始まつて巴來唯一人て、徹頭
徹尾妙法の五字七字に同化して、一代を七字の題目主
養て貰いた人である、

清正公の身の丈は八尺幾寸と云ふ其れに、六尺九寸の
馬にゆつたりと乗り、三尺の立身朝子を冠むり、その
始、十四日はたしか鐵嶺占領の日になる、して見ると
三月一日は海外征伐に何等かの因縁をもつて居ると思
はれる、或は之が感應と云ふのかも知れない、

感應と云へば昨夜の地震は随分烈しかつたが、是は本
日三宅入道だの、犀東道人だの、黄洋優婆塞だの、此
天眼和尚だのと云ふ連中が、天晴會の演説をする前兆
だつたかも知れない(笑聲起る)何ても日蓮主義發表演
説の前兆で、地大に震ふたのに相違ない、素人だから
まだあの位の地震ですんだのだが、若しこれが其それ
しやの演説だつたら六種震動と来るかも知れない、そ
れこそ大變じや(笑聲起る)感應と同時に感孚と云ふこ
とがある(と辯士ボールドに對して字字の解剖を試み)

日蓮主義に感孚すれば、开處に永遠の生命がある、清
正公は此點に於て確かに吾人の先輩である、清
正公は癩癩家であつた、彼の「地震加藤」に見るも其
癩癩が手に取るが如く判る、それは増田長盛が石田三
成の事に就て公に中直りを忠告した、古文書の文句に

斯ふある(此時辯士草稿を讀む)……三成は秀吉に

立烏帽子の内容は法華經二十八品の御經を以て張り詰
たとある、如何に法華の主義を強く信じて居たかは是
れ丈でも解る、

清正公は大變老人の如く思はれる、けれども公の天王
山の戰に参加した時が二十一歳、肥後二十五萬石の拜
領が二十七歳、朝鮮征伐が三十一歳である、
太閤秀吉は非常に御繁昇ぎであつた、天正の十六年島
津征伐の出陣が三月一日、小田原征伐も三月一日、朝
鮮征伐も三月一日出陣の豫定であつたが、病氣の爲め
延期して實は三月廿六日の出陣である、

清正公の脊負つて居た七字の旗は實に太閤から授かつ
たもので、中國征伐の軍旗である、それは赤く朱で書
いた題目であつて、秀吉の所存では一天四海皆歸妙法
の語がひどく氣に入つたので、政略的に宇内併呑の意
氣溼潤たる自己の抱負より、此一天四海の語を珍重し
たのである、

茲に至りて少し云ひたいのは、本日は三月十四日であ
つて、日露役の奉天戰がちょうど三月一日に惣攻撃開
非常に氣に入りの臣である、今の世誰か治部奴杯と云
ふものあらん、然るに公は之に答へて「八幡も照覽あ
れ治部奴と一代中直りは仕るまじ」如何なる事の候と
も經文に我不愛身命但惜無上道とあるからは云云……

……と斯うある、面白いてはないか、
清正公は幼時より日審上人の教訓に待つ處多大であつ
た、それで何でも自分の癩癩を矯めやうと思ふて、兩
袖に鈴をくもりつけて居つた、若し癩癩が起つて兩腕
に力が入ると、直ぐ「チリン」と鈴が鳴る、喫驚し
て温顔に歸ると、斯様に其性癩の矯正に勤めたものだ、
が或時日審上人は其事を聞いて、それは甚だいけない、
凡そ人君たるものは喜怒哀樂なからざるべからず、唯
之を適度に發せしむればよい、何も苦しんで矯める必
要はないと訓へられた、恐らく古往今來清正公の如き

其私淑せる師匠から癩癩御免の許可を受けたものはな
からう(喝采)

清正公の仁慈と云ふ事に就て一條の物語がある、此の
様な事が今日の世に存するなら、我々は草履取ても何

でもやりたい位なものだ。それは斯ふである、或る祭禮の時近郷近在の士女盛装して其儀に列せるが中に、唯一人年の頃廿三四の足軽らしき若武者が、小手腰當の武装で以て毅然として立つて居た、公は之を瞥見して妙な奴だと思はれたが、其日は其儘にすんで、其後十數日を經て公は上臈中にゆくりなく其事を思ひ出した、ちよつと申して置きますが公は名だゝる痔持であつて、何日も高足駄で用を足す、卑陋な嘴だが随分とその御用便が永い、處てその若武者の事を思ひ出すと矢も箆も堪らない、早速臈の中から手を鳴らして足輕の斑鳩平次を呼び、其方の部下に彼様々々のものは無いかと問ふた、平次は取調べますと御座ると一々其部下を詮議して、終に其ものを連れて來た、并處て公は其方祭禮の節何故に唯一人武装して居たかと尋ねられると、左様で御座ります、祭禮とは申しながら多人數押寄せ居る際萬一如何なる狼藉ものゝ出て君の御馬前を騒がし奉らぬとも限らねば、さある時は直ちに取て押へて一分の御奉公を盡し申たく、去りとして生

中武術不鍛練の若輩ゆへ、素手では萬一の時御用に足るまじと存じ、武装して居ましたと答へました、之を聞かれた公は、さても神妙の心掛け、武士は斯くありてこそと、即刻其若者に録二百石を與へて士分に取立てられた、若者の名は澤村才八郎と申して、今の箱根福住樓の主人は其澤村の子孫だとうであります、そうして又次の日斑鳩平次を呼び出して、昨日は如何に心急ぎとは申せ、不淨場へ其方を呼び付けたのは何とも禮儀を失して居た、許して呉れ、是れも全く老少不定の格言を重んじたからと謝されたとある、この天眼が若し三百年の前に生れて居たなら、此度斯る仁慈の君には一命を賭して仕へたに相違ないと思ふ(喝采)

更に清正公の信義と云ふ點を調べて見ると、彼の蔚山に敵の重圍を破りて淺野幸長を救ひ出した一段が、實に尊むべき公の信義を認められる、何しろ大明百萬の大兵が一夜の中に蔚山を十重八十重に取り巻いたのに到底尋常の手段で之を救ひ出すべくもない、然るに剛勇にして義に厚き公の事だから、并は大變と直ちに儀

かの小勢で以て其急に越した、家來のものは逆も此小勢ではと、諫め止めたが聞かれぬ、戰は兵の多少によらず、昨夜到來の明軍定めし疲勞しつらん、其儘に乘じて之を衝き破る、却て是れ戰術と云ふもの、其のみならず本國出陣の際、淺野の父彈正長政より、行長の身を頼まれたる武士の一諾金石より重し、いかで猶豫のなるべきやと、遂に二無二突撃して終に之を救ひ出した、其時の自様が公の筆によりて古文書に残つて居る、斯うである「日本にての約束を冥途まで果すべく候………無論、信義のために一命を賭して突進したのである」

して、先祖の遺功によりて榮らさうな顔に社會に晒し、八公熊公と少しも替らざる公爵、名ばかり皇室の藩屏で候の一本不埒の侯爵、お上から爵位を貰ふて、始めて女ではない乃公は男にて候の男爵、五十にして子て候の子爵連中に、清正公の眞似が出来るものか(拍手大喝采)

其他名古屋城の修繕に就ては、豊臣徳川兩家の間に介在して如何に苦心せられたかは、殆んど想像以上であつて、若し公にして日蓮主義の醇乎たる信念なかりせば、到底かばかりの名士も或は何れの部面にか微塵を殘すのであつたらうが、法華經に同化せられたる清正公の日蓮主義を貫徹せる淨池院殿、これぞ千古に卓越せる日本武士の典型といはるゝ、所以である(喝采)どう

日本武士の典型、日蓮主義の活ける標本たる加藤清正の氣魄………それが日本民族の血液に通ふて居なかつたならば、日清役も日露役も到底戰勝の名譽を擔へなかつたのである、幸にして此の典型此の血液の今猶ほ國民の間に磅礴たるものあり、大に意を強ふするに足ると云ふもので、これを清正公の影、則ち「おかげ」と云ふものである(拍手大喝采)

日蓮 天晴 第三例會 講演

我帝國と妙法五字

小笠原長生

申し上るまでもないが、私は宗教に關しては何等研鑽せる所もない所謂門外漢で、元より諸君に向つて講演を試みるなど、云ふ資格の無いことは、自分に於ても承知して居るので御座ります、然るに前回の節幹事諸君よりは是非何か申し述べるやうにとの御注文があつたので、頗る當惑したのであるが、退いて考へて見ると、吾々如き門外漢の素人判断に當否の判決を與へて下さるのが、本會の主旨の一ツであらう、それには先づ自己の意見を露骨に申上ねば高教を受くる譯にはいかぬと存じましたから、分際をも顧みずに我帝國と妙法五字との關係について、豫て考へて居ります點を申し述べることに致したのである、そこで先づ私の上人を渴仰するに至つた徑路の大要から話したいと思ひます、

一轉私の家は數百年來淺草田圃にある日蓮宗妙法山幸龍寺の檀家なので、私も極く幼少の時分から家族に伴はれて參詣して居つた、それ等の結果でもあるが、二三歳前後より只何となく日蓮上人が好きになつた、たしか明治二十四年と記憶して居りますが、其當時學園會と云ふ文學の會があつて、會員に東洋の三傑を撰ばせたことがある、私も其會員であつたので、之に應じて撰んだ中に日蓮上人を加へた、所が小笠原は妙な人を選んだものだと思ふた人が随分あつた、其時分から思ふと今日は敬虔の念を以て上人を研究され、又は清正公を崇拜する、方々等が日に日に多くなるのは、寔に慶賀に堪へぬのである、併し其當時は斯く云ふ私も上人に歸依するとか渴仰するとか云ふ様な思想は毛頭無かつたのみならず、法華經も御遺文も拜讀したことはなし、實に御傳記すら精しく知らなかつたので、只素人だ位に考へて居つたのである、其後日清戰爭に

從軍して歸京した頃であるが、宅に上總から來た二十四五歳の下男が居りました、至つて正直で無口で能く働くので、家族どもの氣にも入り本人も永く奉公して居たいと云ふて居つたが、或る日の夕刻何の氣なしに書生部屋へ往つて見ますと、平素極く温和な彼の下男が、二三の書生を相手に口角泡を飛ばして激論をやつて居る、私は珍らしいことだと思ふて側で暫く聴くとそれが日蓮上人の議論なので、書生達が刀が折れるとか、波に字が書けるとか、そんな馬鹿氣たことが實際あつてたまるものか、皆他人を難有がらせるために作つた話なのであると評するのを、彼の下男は一生懸命に辯護して居る、あまりに彼れが向氣になつて居るのが可笑しいので、私もつひ調戲つて見る氣になり、書生の肩を持つと、彼れに更に私に向つて滔々と上人の難有いことや教義やらを述べ立てたが、此方は固より教義などは徹底も知らず、又調戲つてやらうと云ふのが目的なのであるから、頭から聴きもしないし、實は聴いても了解りもしないのである、唯彼れが頻りに一

天四海皆歸妙法とか一念三千とか云ふて居たのが、今以て耳に遺つて居りますが、勿論其時は聽流して散々冷評致しますと、彼れは終に聞き直つて、他の事なら鬼に角上人様を惡口するやうなお郎には御奉公は出来ませんから、今日只今からお暇を戴きますと言ひ出した、其容子が顔色が變つて眼が坐り堅い決心が顯れて居る、そこで私も書生も驚いて、種々に詫言るやう宥めるやらして其晩は漸く濟んだが、それから二三日経つと其下男は遂に暇を取つて仕舞ふた、此の一事が少からぬ感動を私に與へて、上人の信者は是程までに熱烈眞面目なものであるかと思ふと、從來單に素人だ位に考へて居た上人が、畏ろしいやうな尊いやうな感じがして參りました、これに付けても信念堅固でない百人の學者が口先きの説法より、愚者一人か身に讀む經文の功德の方が教化の上に力あると云ふことが證明されず、斯の如くして私は幾分か上人を崇敬するの念が出たが、何を云ふにも未だ年齒は若し機會は來らずして、法華經や御遺文を拜讀するには至らなかつた、

其うちに明治三十六年の春大阪に内閣博覧會があつて私に乗つて居りました千代田と云ふ軍艦は、衆人に見せるめ同港の淺橋に繋ぐことになりました、其時圓妙寺の住職深川觀察師が尋ねて來られた、これは同師の令兄が海軍に奉職して居つて私と懇意に致すからである、其際同師より其の著はされた法華經要品訓讀と祖師の小銅像とを貰ひ受けた、これが抑も經を手に取つた始めてある、それから間もなく千代田は芝罘や仁川に碇泊して警備の任に當ることになつたが、其うち日露の關係が漸次難かしくなつて、三十七年に入つてからは愈々危機一髪と云ふ境合にまで切迫した、千代田は唯一隻仁川に居ると、露國の方では常に優勢な軍艦を二隻以上派して我れに對して居るし、加之浮説百出殆んど事實の真相を促へ難いので、艦長以下乗員の苦心は一通りでは魚かつたのである、何故かと云ふと、何時如何なる變が起るかも知れず、起つた際に猛進しさへすればそれで必然忠節を完くし得ると云ふのなら善いが、未だ開戦ともならぬうちに、狀況を

も突めず出先きのものが早まつた事を爲たがために、本國當路者の計畫、艱難を生じ、延いて全局の不結果を來した例は往々ある、されば一國に乾坤一擲の壯舉に出づると云ふ譯にも行かず、深謀熟慮の真相を看破し活斷して機宜の措置を取り、以て本國當路者の計畫を副はねばならぬのである、此處が頭をむづかしい點なので、私の如き經驗に乏しい愚昧のものは、向のこと苦慮したのだが、此の際時々前の法華經を讀んで見ると、了解しない所が多いにも拘らず、幾分か身心不動の眞意義に觸接せる如く感ぜられ、一方では仁川居留地の書林を涉つて得た日蓮上人に關する二三の書を読んで、火のやうな其活精神が私に云ふ可らざる感動を與へまして、始めて上人渴仰の念が萌しよした、其うち内地に歸り職役が了つた頃から、御遺文を眞面目に拜讀して見たが、之れと相前後して一ツの疑問が起つた、それは前會の時に本多大僧正が上人に對する世間の誤解を列擧された中にもあつたので、即ち上人は一王一佛を絶對に主張して居らるゝが、果して口で

云ふ丈の忠君愛國者であらうか、或は弘法の手段として心にもないことを云ふたのではあるまいかと云ふ疑問なので、もし眞の忠君愛國者でないとなれば、其教旨が如何に極理の法門であらうとも、其人が末法の大導師であらうとも、自分は之に歸依してはならぬと考へたのである、ところが此の疑問は更に上人の人格を考へて見て幾くもなく解決し得た、と云ふものは專制時代而かも横暴極まる北條氏を始め諸宗の僧侶から戴つた比較するものもない程な迫害をも、面前の微風程にも思はず前の執權時頼を穢地獄とまで罵つて、大難に遭ふたびにこれこそ法華經の文に符合するのだと歎ばれる程の上人が、何處に心にもないことを言ふ必要があらう、又弘法の爲めにするのなら、寧ろ北條氏に依つた方が得策なのは明瞭なことである、之は少しく敬虔の念を以て研究するものには容易に合點がゆくであらう、ところが更に反對の第二の疑問が起つて來たのは、上人は極端な日本本位主義者で、經文にある一闍笮提若くは斯士等の文字を、常に日本國なりと解

釋せられ、加之日蓮は日本第一の法華經の行者なり日本國の一切衆生の盲目を開ける功德あり我れ日本の柱とならん」と等と呼ばれて居るが、これでも上行菩薩の再誕と自覺されたことに矛盾して居らぬであらうか、抑も上行菩薩が受けた佛勅は、末法の凡ての衆生を濟度するにあるのだ、夫れが何故特に日本日本と日本より先に、世界が無いかのやうに絶叫するのであらう、又果して上行の再誕が第一如何にして此の廣い世界の中で我帝國に出現するものと信じられたてあらうかと云ふ疑問なのである、或る程古來菩薩大師達の中で東北の小國にのみ大乘の機があるとか、法華經は東北に縁があるとか、地を尋ねれば唐の東瀛の西だとか種々な豫言をされた方もあるが、吾々凡夫には是れ丈では上行菩薩が日本に出る理由としてはもの足らぬ心地がするし、又今日より見れば既に事實に於て日蓮上人は法華經を色讀し流布されたのであるから、別段其以前に瀆つて豫言を聞く必要もないのである、夫れよりも私は其出現に付て、もつと確乎不動の大運

由があるか無いかを知りたく思ふたが、遂に當否は知らず法華經にある一大事因縁を以て世に出現すとの一語が根本的理由だと考へました、一大事とは餘經も法華經も衆生の病の藥とならぬと云ふ末法濁世に當り、別付の大法たる妙法蓮華經の五字を以て衆生を濟度すること、因縁の因は上行菩薩が此の大任を靈山にて佛祖より受けて居ること、縁……此の縁の一字が上行何れの地に出現するやの最も大切なる義なので、即ち妙法五字を体現せる實士ならては縁の字に應ずるの資格はないものと私は判断したのだ、そこで讀つて世界を見渡すと、此の資格を具備した國は我帝國より外には一つもない、換言すると妙法五字は我 御國の說明を拜讀せられるのである……是れは後に申し述べ……かゝる大因縁の下に我帝國に出現せられた日蓮上人が、なべて此の靈國を他國と同一と見るゝものか、即ち妙法五字に對する絕對信仰の上に打立てられし極理の大意義を含める忠君愛國なので、本佛の理想國空婆即家光士の模範國とは帝國のみであるが故に、

い、此の轉法輪が即ち妙法蓮華經の廣宜流布にあることは勿論である

抑も妙法五字とは如何なるものであるか、日蓮上人も私に會通を加ふれば本文を讀すが如しと云はれた程の總言不思議の境界であるから、吾々が解釋を試み得られぬのは云ふまでもなく、又會得した人としても容易なことと説き盡されやう等もない、只私は諸先輩の高著に鑑みて幾分心解したる點の主要を、潜越ながら開陳して叱正を乞ひたいのである、我日蓮上人は佛陀觀宇宙觀、人生觀の諸方面より法華經を妙解して、從果向因説を主張し、法界を以て無始實在圓慈の本佛、三身即一、血あり涙ある俱体的本佛の大慈悲中に攝収されたるものと認められ、本佛を離れたる法界ある可らずと斷じて、事顯本を明かされたので、上には此の絕對靈位の本佛ありて常に大慈悲を垂れて衆生を救濟せんとし、下に、無數の衆生ありて無上の歸依を此の本佛に捧げて以て歸一すべく、此の本佛大慈の妙用即ち妙法なりとの解釋ではあるまいか、詮ずる所は積極的

是れ實に世界の眼目眞理眞法の奉行者であつて、之れあるが爲めに世界も尊いのだと感ぜられたる上人が極端な日本本位主義を取られたのは怪しむに足らぬこと、畢竟一天四海皆歸妙法の大目的は、此の靈國の發展に伴ふべきものと確認せられたのであらう、以上の信念を透して當時の國狀を觀られた上人は憤慨せずには居られまい、魔族は此の世界の實士たる靈國にも横行して、日光暫く雲霧に蔽はれ、權佛的爲政者たる執權北條氏が横暴を逞しくするのを叱責折伏しやうとする輔徒は一人もない、のみならず反つて之れに迎合して御堂の大を鼓ふと云ふ有様であつたから、上人は決然立正安國の爲め蹶起して、千萬人を對手に奮闘を開始して大法輪を轉ぜられたので、先づ第一に執權を責め權教を破して此の靈國を救ひ、以て本有の正相を還元せしめやうとされたのである、されば其師子吼中には一見矯激に過ぎはせぬかと思はるゝものがあるが玩味し來ると是れ皆靈國民に大自覺を促して居るので涙を呑んで杖を振り上ぐる慈父の嚴調ならぬものはな

統一主義の事的開闢と考へらるゝ、此の妙旨を國家觀に轉ずると、具体的本佛は君主、法界は國家、衆生は國民であらう、されば君と離れては國家の存在を許さず、又其君位は絕對的健亮亦絕對の忠節を之に捧ぐると云ふ邦國にして、始めて妙法の体現とも大乘の機ありとも稱せらるべきだと私は信ずるのである、そこで古來世界に存在し又存在しつゝある許多の邦國中、其建國の精神と歴史とに觀て、我帝國以外果して絕對靈位に戴いて萬有之れに歸趨するもの、換言すると君主を離れて國家なき國を有するものが有るであらうか、其建國の精神はと云へば、徳望か武力か智略か何れにしても競争に打勝つた結果で相對的であるから、従つて運命に長短こそあれ、帝座は屢々優者から優者にと争奪せられて絕對の靈位を履んで居るものは一つも無い、申すも惶いが、皇國のみは建國の大御心が既に已に絶對無上であつて、崇高とも雄大とも比すべきものもなく、偏に天意御繼承の光輝を仰ぎ奉るのである「瑞穂の國は是れ吾子孫の王たるべき地なり寶祚の

隆へまさんこと當に天壤と究りなかるべし」との神勅の下に、始の神統を垂れて之れを無窮に傳へ給ひ、億兆の慈念し給ふ大聖謨は茲に時間と空間とを超越したる大靈位の御威威と顯現し、臣民之を奉戴して無上の忠誠を捧げ無窮に歸一し奉つて居るのは、正に妙法の説明せる所である、更に國民道德より謂ふも、忠の一字が其根本義となつて、之れありて後の仁愛孝貞節義等であるから、忠を離れては道德成立せず、諸道徳は究竟して忠に歸するの、是れ亦妙法の姿と拜する。

次に蓮華の二字は、無比の御國轉たる帝國が世界に於ける資格と使命とを説明して居るかと思はれる、私は能くは存じませんが、一轉此の二字を衆生に即する時は蓮華を衆生本有の佛性、泥土を有漏身と觀るとのこと、乃ち衆生の佛性は煩惱未斷なる凡夫の心田にも依然存在して能く清淨なるのみならず、早晚必ず發展して佛果を得せしむること、蓮華が泥土より生じて美しき花開き清き實を結ぶに等しいと云ふのであるが

經とは「ツネニノヲ」ミチ」等と謂じて、永久不變の意義であらう、されば妙法蓮華經に南無即ち歸命すると云ふことを世法に妙解すると、億兆一心となりて無上の忠節を捧げ、天成の帝業を輔翼し奉り、御威徳を益々世界に輝して、全人類を救済すべきは我帝國の永久不變の使命たることを一命に懸けて持念せよとのことだと、私は確信して居るのである、さては「一閻浮提第一の本尊此國に立つべし月支震且いまだ此の本尊ましまさず」と云ふことの意味深重なることも愈々判然し、法華を讀るものは世法を得」との語も活躍して、上人の教旨が法俗二道に涉り現當二世を一貫した極致の活法門たることも、益々會得するやうな氣が致します、以上が私の直覺した點の大要で、諸君の御指導を受ければ本懐で御座ります、

之を國土觀に移すと世界の現相はどうであるか、列國何れも博愛人道を口にしては居る、選取の場合にも國權保持の爲めと云ふては居るが、果して干戈を動かすに當りて、心裏公明正大一點の私慾なく、降魔の利劍を振るの觀念を以て立てる、所謂王者の節………竄食壘聚して迎へらるべきものが幾何あるであらうか、其事績に徴するも、概ね自利の爲めには國としての道德情義を無視し、些の口實でも發見すると、忽ち貪慾の爪牙を現はして弱を凌ぎ小を虐げ、殆んど三惡道を現出して居るのは取りも直さず國家的煩惱である、然しながら是れが人類終局の運命とは思はれぬ、必ずや之れを救済すべき使命を帯べる大靈力が存在して居るに相違ない、而して此の靈力は爭奪發生の根本を成せる相對の意義を超越した絕對位でなければ有し得ぬこと勿論である、是に於て私は上に萬世一系絕對圓慈の御威威まします、下に絕對忠の靈氣磅礴せる帝國を以て、正しく泥土の世界に發生せる蓮華に異ならぬと拜察する。

法華經壽量品に對する台日兩祖の異點

清水梁山君 講演

天晴會の組織に就ては自分は格別の歡喜を表する次第で、隨て講演の依頼をも喜んで甘諾したのである、が此の講題は極めて陳腐のもので、而も自分の説でなく先師の既に論道せられし點である、けれども事は極めて重要な論目であるから、茲に之を掲げ出した次第である、大義名分の上からは、台日とは言ひたくはないけれども、古來の慣用に隨ひ台日兩祖と標榜し、而も其異點の極めて緊要なる論點を擧げて見たいので、此問題を明に決定して始めて我々の信行は確定すること、思ふ、宗門の學者各派の先徳既に之を盡せるが如くにして、而も宗門の學者も、天台に與同の説を骨張するを見る、これを由々敷大事にして、各學者達の此問題に間違なきを期する爲めには、是非この論題講究の必要

を認めるのである、
 今晚は先刻の晚餐で少し酒を過ぎまして、酔ての講演は甚だ失禮の様だが、併し祖師の御門人は酒ながらの妙談も一向拒斥しないので、三毒強盛の人のたすかる御法義ですから、況んや少々々の酒をやと御承知を願ひ度いのである
 又手本題に入りまして法華經の教誨は、支那に於ては天台之が先驅をなして其尊貴を唱導し、我祖日本に出で、更に大いに之を絶叫せられた、てすから外見上同一型の如く見做され、日蓮は天台の議論を手取り早やに肝要のみ撰取したので、畢竟天台の出世に過ぎない、斯様に他宗のものは思ふて居る、そうして門内各派の學者の考は如何と云ふに、天台と異ならんと欲しつゝ結局天台打同に陥つて居る、本述論信念論修行論に於て尤も打同の失を免れない、内自ら天台に打同して、而も外天台を過層昨食と貶す、寧んぞ其可なるを知らんやてある
 自分共も物心を覺えて已來、苦患しつゝあるのは此台

當問題である、台當問題に確乎たる解決を與へてこそ始めて念佛無間等の四個格言を唱導し得らるゝので、特に眞言亡國の斷案は、此問題の解決を得なければ到底卒爾に口を出すべし限りでない、我々は祖師の御門人として、色々の問題を解決せなければならんが、特に台當の異目に判然たる解決を與へ得ずんば、四個の格言は何のそのである、畢竟此問題を明かにせずんば殆んど我宗の立場が無いと云ふてよろしい、
 法華經に對する台當の異目に就ては、優陀那師や本妙律師などは色々言ふて居るが明了しない、古來の議論は一念三千の理事に重きを置ける傾向あれども、夫は我々の威服仕らぬ處で、壽量品の本佛に對する天台と日蓮の意見の相異點、此大相異點に重きを置かねば教義の根本は到底確立しない、
 然らば天台は壽量品を如何に見しやと云ふに、釋尊は十九出家三十成道の佛では無い、久遠の佛であると斯う文相通り言ふので、小乗は且らく措て、大乘には十方に淨土を説き十方有佛と説く、其十方の中の娑婆、

諸佛の中の釋迦、即ち此無限の宇宙間中の一部たる娑婆の教主の釋迦佛の久遠を明したるものは壽量品の五百塵點久遠説なりと、是れ天台の見てある、則ち佛々相對土々相對の上に局限せられたる立論である、故に文句に五百塵點の數に就て自分の疑を正直に自白してある、曰く「或は他佛ありて六百塵點とも説かなん、或は佛ありて七百塵點とも説かなん、今此釋迦は五百塵點なり」と、てすから天台は壽量品の佛は法界中一部の娑婆世界の教主釋尊の久遠なるを明すと見たのである、夫れだから壽量の開顯は釋尊丈で諸佛には關係がない、隨て若し釋迦に勝りし佛ありとすれば、或は六百塵點七百塵點とも説くとの説になる、されば十方諸佛の内釋迦一佛の久遠を明す、例して知るべし他の諸佛も亦久遠ありと……是れ天台の見てある、果して然らば妙樂の毘盧の一本も、一月萬影も、要するに十方諸佛を統一したる絶待佛の論ではなくして、釋迦の一本釋迦の一月となり釋迦一佛の久遠を明すのみとなる、この論式より推斷すれば、如何なる佛にも開述

顯本は出來る、後來親鸞が久遠實成の阿彌陀と言ひたる誤解も全く是れより來れるもので、釋迦に久遠あらば彌陀にも久遠を言ひ得るからである、即ち彌陀に久遠を論ぜし親鸞は、純粹に「十方に久遠の佛あり故に壽量品は唯釋迦の顯本のみ」と説く所の天台の意を紹介したものと云はなければならん、此點を知らずして六百年來折伏を繼續せるは、殆んど其意を知るに苦しむ次第で、念佛門徒が折伏の言に聞くなく、信伏隨從の誠意をしかぬのは尤の事と思ふ、況や化城喻品を見ると彌陀の方が釋迦より兄になつて居る位だ、
 然らば我祖は如何と云ふに、日蓮上人はそんな局限の佛を認めて居られない、即ち壽量品の本佛なるものは、單に娑婆の教主でもなければ、又十方の中の佛界を指せしものでもない、そは御義口傳(方便品の下)に「妙法蓮華經は十界の頂上也」と示し、諸法實相抄に「釋迦多寶の二佛と云ふも用の佛なり妙法蓮華經こそ本佛にては御座し候へ」と説き給ふによりて明なりと思ふ、則ち十界の頂上を本佛と云ふので、他宗他門は

十界の中の人間は横に佛界を望んで修行するのです、彌陀等は此の十界中の佛と言ふので、往生と言ふも此の佛界に到達することを言ふのです、(此時講師葉巻煙草十本を卓上に列ねて其の横越の姿を示し更に一本の煙草を右手高く擡げて絶待の本佛を表す) 當家の意では、十界の頂上と云ふのだから、横を見ないで上を見れば見える、此の堅に本佛を仰ぎ見る之を頂上と云ふのです、故に仰向きさへすれば地獄は地獄のまゝ人間は人間のまゝ佛界は佛界のまゝに本佛に接合し得られる

此の仰向きさへすれば吾人に見ることの出来る此の本佛を本尊と稱する、釋尊も彌陀も皆此本尊に一如したる人である、我宗の意にては、釋尊は此の本佛に親む可き道を教へたのである、故に宗祖が之を開迹顯本の釋迦牟尼佛と言はれたのである、

約言すれば天台は釋迦一佛の毒量品と見た、是れは理顯本であつて事顯本ではない、故に宗祖は諸佛の久遠を論ずれば諸佛のみならず地獄にも又久遠ありと云ふ

るべからざる時代の要求等其要を摘んで熱誠なる説明を試み、第二席清水梁山師は『大日本』と題して日本國の稱呼に大の一字を冠らしめ大日本と稱ひ出せし其典據之を歴史に索むるに莫として其所據なし、獨り日蓮上人の遺文中「小蒙古より大日本を襲來する」の語あり、是れ其本據ならずんばならず、斯くて建國の強固なる意味を含める大日本の稱號は統一的な宗教日蓮によりて大多勝の三義を包める最尊無上の國號となれりとの斷定を興へ拍手聲裡に降壇、次で第三席に現はれたる高島平三郎氏は此の誤解を釋くべく『情の日蓮上人』と題し謹嚴なる態度もて上人の高潔なる情緒の一面を列擧して一々之を遺文的據に證し縷々數千言聽者をして坐るに上人の面影を偲ばしめたり、次に三宅雄二郎氏は無題の下に登壇せられたるが其朴訥なる口舌より警句讀出笑聲堂の内外にあふれ云ひ知れぬ興味を滿堂の聽衆に與へたり、博士演説の要旨は之を『日蓮宗の過去現在及び將來』とも題すべく則ち今日は陰曆二月廿三日で日宗の教傑堯山日輝和上の命日だ、此人の門下には濟々たる多士を出した、臨田堯淳の堯と清水梁山の山とは輝師の一字を貰つたのだが二人で日輝師になれるかどうか、實は兩師共一人で脊負つて或

のです、本佛は十界已上に超出して居る、此の本佛の力は釋迦にも来る、亦吾人が妙法五字を唱ふる處にも本佛の三輪の力が来る、是れ毒量文底の深義である、願くは自他彼此を論ぜず此の十界の頂上の佛に重きを置かれんことを、.....

記者曰く、本篇前半は稍々妥當の説たるを認むれども、其の後半結論は首肯する能はざるのみならず、却て是れ天台打同の説たるを疑はざるを得ず、記者の意見は追て機を見て發表する所あらん、

報 道

○日蓮鑽仰天晴會發表演説

同會の發表大演説會は三月十四日神田一ツ橋帝國教育會に開かれ聽衆無慮六百餘名、特に聽衆の八分以上が學生を以て滿されたるは教界の前途心強きを覺へしめたり、鑒て午後一時を報ずるや幹事の一人たる柴田一能氏は開會の辭として天晴會の生れ出てし由來生れざる

は夫れ以上に出る積りであらう、願くは小日蓮に甘ぜず段々進みて日蓮以上の人物が出る様にしたいたしむるなり、次に『日蓮上人の人格と其教義』の題下に登壇せし境野黃洋氏は予は日蓮上人及び日蓮宗の研究者にして未だ絶對的信者にあらずと先づ自己の立場を明にし、其人格を論じては上人の猛烈なる奮闘部面と謙遜抑讓の美德とを遺文に據りて立證し其教義を論じては活現主義なりと斷じて禪念佛真言のそれと比較對照して所謂四個格言を羅知たらしめ、氏の明晰なる頭腦と犀利なる舌鋒は縱横無盡に此大問題を論道了してどう見ても上人は法華經に手足の生へた人としか思れず、上人の眼に映せし法華經は紙も文字もなく唯如來の血あるのみ識見極めて清透、信仰益々激烈、若し氣を付けて見れば上人は超歴史的人物なり等、言々活躍、破るゝが如き大喝采裡に其説を結びたり、次で第六席に登壇せし鈴木充美氏(飛入)は『予の日蓮觀』と題して鏗倉當年の腐敗墮落せる教界の現状を略叙して上人の法華唱道が高尙なる證見と時代救済の止むなきに出でし由縁を演べ、第七席國府原東氏は『予の見たる日蓮上人』と題して、氏が日蓮上人の遺蹟を踏査して得たる諸種材料により上人の御像の眞偽にまで論及し考證該博

趣味津々轉して元寇の國難を詳論して舉國一致此國難に當らざるべからざるを絶叫せし上人の面目を忍べと論結し、最後に『日蓮主義より見たる加藤清正』の題を掲げて登壇せし鈴木天眼氏は七字の題目が日蓮上人か日蓮上人が七字の題目か此二合体せる之を日蓮主義と云ふと標榜して、さて此妙法に同化し此上人の精神に感孚して高潔豪邁なる人格を養ひ得たる清正公を論じて其信義仁愛潔癖さては豊臣徳川兩家の間に立ちて名古屋城修理の苦衷談杯一々歴史の左券を捉らへて縦横其人格を紹介し、此日本武士の典型に對して敬意を拂ふなく濁洗滔々自然に任せば國家の前途はた如何と萬丈の氣焔を吐く、斯くて時間已に五時を過ぎければ演説は是にて終了更に餘興として田中智學居士の作曲になれる筑前琵琶『小松原』の一曲松本錦子女史によりて彈奏せられ聴衆みないみじき感に打れ上人當年の艱難を偲み涙を袖にのみ無量の法益を臨理に收めて散會せしは午後六時強なりき、さて又引續きて別室に天晴會月次例會を開き出席會員四十餘名、小笠原長生子の『我帝國と妙法五字』(晚餐前)、清水梁山師の『法華經壽量品に對する台日兩祖の相異點』(晚餐後)の講演ありたり、其演説及講演の詳細は本團同人の筆記により

て別項に掲載したり讀者就て之を熟覽ありたし

○尙風會記事
本納支部發會式

先頃山武郡東金町に於て發會式を擧げたる千葉縣尙風會は漸次各地に支部を設置し大に活動を許る方針なりとは豫て聞く處なるが去る廿日長生郡本納町に同支部を設け同町小學校に於いて之れが發會式と兼て第二回の講演會を開かれたり當日は生憎の雨天にも拘らず聴衆は己に會場立錫の地なき迄詰掛けられ斯くて午後一時會は全郡々會議長齊藤自治夫氏の挨拶に依りて開かれたり氏は先づ尙風會が政黨に關せず宗教に偏せず一意教育、勸業、衛生、自治、經濟、道德、風俗、習慣等に就いて風氣品性の改善向上を期するを以て其目的と爲すと説き現下社會の有らゆる墮落面の事實を上げ憤慨遺る方無しと卓を打ちて喝破し氏が特得の雄辯と熱烈なる態度は聴衆に痛く感動を興へたり其より君が代の唱歌に次て鈴木本校々長の教育勸語捧讀飯高東洋中學校長の戊申詔書捧讀を以て式を終り直ちに講演に入れば第一席山本大佐は『尙風會の成立を祝す』の題下に自分は千葉在住の身なれば今後本會の爲めには所懐

を吐いて諸子と相談するの機會少なからざるべし今回は遠來の講師多くして予が此時間を長く取るは本意ならざるに付單に本會を歓迎するの意思を述ぶるに止めんとて尙風會の活動上に付き周到なる注意を興へ縣民は須らく眞面目に此會の隆昌を圖るに盡すべき義務ありと説かれ第二席吉田千葉中學長は『勤儉の美風』と題し我帝國の地位と國力とを世界に於ける各一等國の其れに比較し戊申詔書喚發の由來を説き勤儉の風を起して 旨に適ひ奉らんことに心掛けざるべからず斯くせば廿億の債愛ふるに足らずとて普佛戰爭後に於ける佛國民の奮發狀況を示して聴衆を感激せしめ第三席内務省地方局員前田宇治郎氏は共同の精神なる題下、共同の精神が如何に貴重なるかを種々の實例に依りて詳細に論述せられ國家の興廢は繫つて國民が共同の精神に富むと否とにあるを熱心に説かれ最後に内務省警保局員法學士長岡保一氏登壇先づ曰く今日は國府種德氏が當地に臨まひへき筈なりしに同氏の姉君兩三日前死去せられ今日葬儀を行はるゝ都合より自分が代りに出席したりと述べ「農村と報徳」の題下に不良少年及び世の犯罪事實の如きは都會に在りて周圍の事情に依り製造せらるゝ關係と農村は全く之に反して其曲れ

るものが自然直くなる實例と心理作用とを叙し二宮翁報徳主義の至誠、勤勞、分度、推譲につき懇篤説明を興へられ一同をして深く感動を起さしめたり右終つて午後五時卅分閉會せり其れより同所に有志茶話會を催し席上山本大佐を始め會員數名の演説ありて全く散會せしは同六時卅分なりし因に當支部開設に付き特に盡力せられしは鈴木作樂、白鳥開安、齊藤自治夫、成島泰行、石渡岩雄、鶴澤次任、飯高東洋中學校長、吉田醫士、深山佑一、萬屋主人の諸氏其他役場吏員、學校長職員、駐在逕査の諸氏なりと云ふ

茂原支部發會式

別項長生郡本納支部發會式の翌廿一日は同郡茂原藻原寺に於て茂原支部發會式を舉行せり午後一時半先づ白井勇二郎氏尙風會趣旨を朗讀し次に醫學士千葉彌次馬氏の戊申詔書の朗讀、佐瀬辰之助氏の教育勸語朗讀終りて第一席内務省地方局員前田宇治郎氏勤勞の本義と題して上杉鷹山公の格言及其他幾多の實例を擧げて熱心に説き終り第二席内務省派遣法學士岡隆一郎氏は報徳の精神と題して町村を治むるに報徳の精神が必要なりとて二宮尊徳翁の教へを引いて詳細を盡し尙ほ尙風

會が日蓮宗一派の團體なりせば内務省は此の會に吏員を派遣せし一般人民の好良の團體たるべきを思ふて斯くは吏員を派遣講演するに至らしめたるもの故諸君は此の觀念を以て望まれたく又時間を棄すは萬事を乱すの基なれば尙風會の一つとして特に時間を重んずるとを望むとして却々に愛嬌ある講演あり第三席法學博士轉澤總明氏は情の教育、趣味教育及び團體生活の必要を説き夫れより聖人日蓮の生れたる地に尙風會の大團體の起りたるを喜ぶとて茂原支部發會式を祝する旨を述べ第四席騎兵大佐山本米太郎氏は軍人精神の沿革と題して十年戦役、日清、日露戦役の軍人氣質を巧みに滑稽諧謔を交へて叙し終りて降壇し第五席本縣技師山本竹藏氏は三重縣四ヶ郷村の製絲家伊藤小左衛門の家憲が克く貯へ能く散ずる理想的財産家なりとて其家庭の有様を述べ尋いて尙風會の統一的發達を望み第六席水村道洋師は宗教と教育の題下に各種の教育思想を比較し最後に日蓮の教を説きて降壇せり次いで千葉彌次馬氏閉會の辞を述べ散會せり時に午後五時十分夫れより有志廿餘名は大和樓に晚餐會を開けり

○國友日斌師の九州巡教志 今茲春王三月初半西州之地に本化之宗風を宣揚すべく綾部を去て先づ京都妙滿

寺に入る、偶々浪界之俊傑桃中軒岡本峰吉氏之入洛せるに會し即ち同行して征西之途につく、日は月を異にして正に釋尊入滅之日、天晴地明、風塵起らず、何處子君より長詩を送りて行を壯にせらる。

大阪に九州人士と日蓮を談じ道義を論じて淹留若干、十八日博多に着す、來り會せる東西之志士と道義宗教を語りて時の極めて速きを嘆きつゝ、十九日久留米に轉じ本泰寺に二日間錫を留めて、曉さめてより深更擲に退くまで行化少も廢せず、主として法華を基礎とせる道義を訓へて待絶兩善の調和を計る所あり、廿一日渡瀬新興寺に移りて二日間久留米に同じ

廿三日柳川妙經寺に向ふ、永く教化宜を得ず加るに現下無任にして寺檀共に頽廢せりと聞くまゝに觀察を兼て毒鼓を振はんと期せしなり、雨切にふる、至れば狀況案に越たり、寺は地の利を欠けるに夜に入りてより暴雨に變じ、加ふるに準備の時間乏し、先には一名の來聽者すらなかりし歴史を有する柳川町にして辛ふじて四十數名を集め得しかば意氣大に昂りて壇上口舌特に力あり

翌大牟田町に向ふ、桃中軒岡本氏の好意によりて土地の有志兩吉田氏等及信徒淺見氏等の熱心なる準備の下

に招かれしなり、壇上酒を命じて大に時事を論じ大に宇内を論じ大に風教を説き來りて更に至志至孝の偉人日蓮上人の人格と主義を紹介する所あり、會果て、有志と大に歎む、意氣更に々々注望、終に夜明けたり、翌此地に布教所新設の議を決し、又有志と大に宇内經綸策を談じて蒙古行を勸めらる、特に此地の開創弘教が功果多く、從 愉快なりしを認めたり

廣島講習會の爲に惜しき九州に一先づ別れを告げて海峽を越ぬ、

○美作通信 嘗て顯本大學林に教鞭を執り、篤學の聲聞ありし山名木信師は、先頃津山本蓮寺へ住職せられたり、爾來吃々として教義發展に焦心せられたり、ありけるが今回同地に天晴會支部を設立し大に活動せらるゝ事になれり吾人は切に成功を祈り、師の健全ならむことを併せて禱する所なり

○大坂教信 本誌の編輯主任なりし梶木日種師は客冬大坂蓮成寺へ赴任せられしが同師は大坂教界に於ける弊害迷信を除去し強健なる思想信仰を扶植するを自己が現在の境遇より考察せられ之を急務として實行する方針なれば浪速の教會も花上花を添ふるの好果を收めんと同師の實力に吾人は信頼して今より樂む所なり

謹告

明治拾八年東北地方凶饑の慘狀に對し、本團は諸君の同情に訴へ、少分の義助を致し候處、今回岩手福島宮城三縣知事より、左項の如き感謝狀を贈られたり、素より區少の同情に對し、如斯町重なる感謝狀に接するは愧赧の至りなれども、當路者が銳意盡力せられたるの結果、救濟の仁恵を全ふし、且つ、興産の發達を企圖せられ東北地方發展の曙光を實現するに至らんとす、本團は讀者諸君とその悦びを俱にし其義捐の金品は輕微なりと雖も、之に依て今後この同情心を社會救濟の方面に倍々踐がん事を祈候敬具

統一團

拜啓陳者貴社は去三十八年東北地方凶饑に際し深厚なる同情を寄せられ義捐金品募集に關し日夜盡瘁せられたる爲に四方慈善家よりの寄贈金品は實に巨萬の額に達し救濟上多大の便益を與へられたる其仁愛なる至情は本官等の感激措く能はざる所なり而して精密慎重なる調査を遂げ窮民救濟の傍ら恒産の發達に有益なる事業を擇選して其資に充て以て博愛仁慈なる恩恵を感愛せしめたり依て爰に感謝の意を表し候敬具

明治四十一年二月一日

巖手縣知事 笠井信一
 福島縣知事 平岡定太郎
 宮城縣知事 龜井英三郎

管長大僧正本多日生師序
文學博士三上參次先生序
僧 正野口日主師題字
故僧 正清瀨真雄師 著

日蓮主義

第一全一冊
定價金四十五錢
郵税金六錢

著者の自説に曰く破天荒の快著、日蓮主義生る、鎌倉の社に立て獅子吼したる日蓮の聲は遺憾なく此書に依て聞かる。耳の弱者は去て自然主義に赴け、耳の強き者のみ來て本書の雷音を聞け。

發行所 東京府荏原郡品川町三番地
品川統一社
東京市京橋區南傳馬町三丁目五番地
須原屋

主筆 高鍋天統

統一新聞

當分毎月三回
(廿一日發行)

統一主義(宗教及政治)の機關新聞!!!

東京北品川新宿海岸馬車會社跡
統一品川統一社

(印目堂法三)



佛書表具 佛像大販賣

佛書表具の元祖
各宗御寺院御入用品一切何にても多少に不限御注文仰付らるべし佛書は申すに不反御尙像書專門 木魚位牌卸小賣

小包條例附三法堂諸品發賣目錄(正價付)

佛書表具 佛像大販賣
佛書表具の元祖、各宗御寺院御入用品一切何にても多少に不限御注文仰付らるべし佛書は申すに不反御尙像書專門 木魚位牌卸小賣

佛書表具の元祖、各宗御寺院御入用品一切何にても多少に不限御注文仰付らるべし佛書は申すに不反御尙像書專門 木魚位牌卸小賣

興國の宗教
菊五號活字
二百頁全一冊
定價金五十錢
郵税金六錢

發行所 東京府荏原郡品川町三番地
品川統一社
東京市京橋區南傳馬町三丁目五番地
須原屋

本光院日明事大石養淳著
日蓮宗說教書
定價金壹圓陸角七分
郵税金壹角二分
三月一冊

發行所 東京府荏原郡品川町三番地
品川統一社
東京市京橋區南傳馬町三丁目五番地
須原屋

一 發行期日 毎月一回十五日
一 誌 料 一冊金六錢、十二冊前金六十五錢
一 廣告料 一頁拾圓、半頁六圓、四分ノ一頁三圓五十錢、特別廣告十五圓ヨリ二十五圓マデ

一 購讀申込 住所氏名を楷書にて認められたし
一 代金拂込 振替貯金を使とす、拂込用紙は最寄郵便局より受取られたし、但し此の場合には誌料の外に金貳錢を振替口座手数料として餘分に拂込ありたし

明治四十二年四月十五日印刷發行
發行所 東京府荏原郡品川町三番地
品川統一社
東京市京橋區南傳馬町三丁目五番地
須原屋

統一

第一百七十一號

